

V-4

CD20 陽性多発性骨髄腫の 1 例

山下美穂子¹、藤本佳子¹、清水大介¹、西田一弘¹、松本洋典¹、野村憲一¹、谷口享子¹、志村和穂¹、堀池重夫¹、島崎千尋¹、中村栄男²、谷脇雅史¹

京都府立医科大学大学院血液・腫瘍内科学¹、名古屋大学大学院臓器病態診断学²

【目的】形質細胞性腫瘍 (Plasma cell dyscrasia, PCD) の 30% で CD20 陽性の表面形質を示すことが報告されている。近年、*in vitro* で B 細胞が腫瘍増加の一因を担っている事が報告され、Rituximab (以下 Rit) の CD20 陽性骨髄腫に対する有効性が期待されている。今回、難治性多発性骨髄腫に対して Rit 単剤治療を施行した 1 症例を経験したので報告する。

【症例】76 歳男性。1996 年 11 月、腰痛を主訴に受診。骨腫瘍を認め、生検の結果、多発性骨髄腫 (IgG-) Stage と診断された。骨髄穿刺では myeloma cell を 53.6% に認めた。染色体は正常核型であった。1997 年 2 月より 3 コースの放射線照射 + 化学療法 (IFN-VMCP 療法) を開始したが、抵抗性であったため、以後は外来で CP 療法を施行。2007 年 1 月頃より徐々に病勢は悪化したため骨髄穿刺を再度施行。CD20 陽性骨髄腫細胞は 98.9% であり、G-分染法により 46,XY,der(14)t(11;14)(q13;q32),add(22)(q13)[1]/46, idem,add(9)(q22)[1] の異常を検出した。WBC $4300 \times 10^3/\mu\text{l}$ 、Hb6.1g/dl、PLT $126 \times 10^3/\mu\text{l}$ 。以後 VAD 療法 1 コースを行うも効果は一過性であり、5 月 8 日より Rit580mg の投与を月 2 回から 3 回の間隔で行い 7 月 10 日に計 7 コースを終了した。血清 IgG 値は治療前値 2669mg/dl からは 7 コース後に 2398mg/dl へとわずかに低下したのみで、治療効果は Blade の基準より NC と判定された。

【結論】CD20 陽性骨髄腫に対する Rit の有効性についてはさらに検討を要する。